

cm未満、幅2.0～2.5cm未満、D：長さ2.5～3.0cm未満、幅2.0cm未満）、小型（E：長さ2.5cm未満、幅2.0cm未満、F：長さ2.5cm未満、幅2.0～2.5cm未満）の基準で分類するとモモはC期中型C類、D期小型E類がそれぞれ多い。クルミはB期大型A類、C期大型A類、D期A類がそれぞれ多い。

5 油田遺跡をとりまく景観について

今回の油田遺跡の調査では、住居址などの居住域に関わる遺構は希薄であった。一方、富士川右岸の沖積低地（甲府盆地内の最低地）という立地条件からも捉えられるように、生産域に伴う遺構・遺物が検出されている。ここでは、第IV章1の土壌分析による油田遺跡の古地理・古環境の検討結果を踏まえ、考古学的側面（遺構・遺物の検出状況）から遺跡をとりまく景観を整理してみたい。

（1）第3遺構面（弥生時代中期前半（A期）～古墳時代初頭（C期））

当該期の主たる生業活動は、I区第2面の遺構内・遺構外から検出された籾・雑穀類の種子圧痕が残された土器や竪杵の存在から水稻・雑穀類の栽培であったことが推定される。これは、各調査区の土壌分析の結果において調査区一帯がシルト・粘土などの細粒碎屑物の堆積が進行しており、河川の後背湿地のような場所となり、ヨシ属などの大型草本植物が繁茂し、中でもI区第2面（18層）から僅かであるが栽培種のイネ属が検出されたことから首肯されよう。また、石鍬の存在も本地域（沖積低地）での活動状況（水稻などに関わる開墾）を示唆するものであろう。さらに、I区第2面の土器集中区（SR01）からは、黒曜石製の石鍬やチップ・フレイクなど多出し、石器製作の痕跡が見い出され、狩猟活動も行われていたことが推定される。

（2）第2遺構面（古墳時代後期（D期））

本時期は、御勅使川扇状地の扇端堆積物が堆積後、ヨシ属などの草本植物からなる植生が成立し、I区～IV区のいずれの調査区からも栽培種のイネ属が高率に出現するようになり、I区第1面の水稻耕作に伴うと考えられる杭列（SA01）の検出とともに、扇状地扇端から低地にかけて、稲作が広い範囲で行われたことが窺われる。また、雨乞儀式との関わりが考えられるⅢ区第2面の土器集中区（SR05）の存在も間接的ではあるが生業活動（水稻・雑穀類の栽培）を示唆するものであろう。

（3）第1遺構面（平安時代（E期））

当該期においては、調査域の景観を一変したものとみられる大規模な土石流堆積物（I区北側に土石流が通過した谷が確認されている）がすべての調査区に堆積し、その後、栽培種のイネ属由来の化石が多産するようになり、扇状地扇端付近で稲作が行われるようになる。これは、Ⅲ区第1面で水田が検出されていることやことから首肯される。また、イネ属の植物珪酸体は現在の水田耕土とほぼ同等の値を示し、後背地域の広い範囲で稲作が行われていたかあるいはその集約度が高くなっていたことなどが想定されている。さらに、Ⅱ区（7層）からはソバ属花粉化石も検出されたことから、当時の栽培種の一つであった可能性が指摘されている。なお、本期の土石流の堆積により調査区すべてが扇状地上に立地することになる。

以後、本地域は現代に至るまで豊富な湧水を利用して水稻耕作や畑作を主とする生業活動が行われてきている。

6 山梨県の弥生時代中期後半から後期土器の様相について－近年の出土資料を中心にして－

近年、山梨県では大規模事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が数多く行われ、対象地域も丘陵地などに限らず甲府盆地内の沖積地におよぶようになり、甲府盆地西縁の富士川流域における中部横断自動車道建設に伴う油田遺跡を始めとする調査では弥生時代中期初頭～古墳時代初頭の資料が多量に検出され、1986年に群馬で開催されたシンポジウム『東日本における中期後半の弥生土器』の頃とは比較にならぬほど著しい増化傾向が窺える。

このような資料の蓄積が進む中、浜田晋介氏、中山誠二氏、小林健二氏の一連の研究成果が発表され、該期土器の変遷が明確化し、昨年、長野、山梨の両県において開催された「弥生土器を語る会」では、さらに該期土器群の様相の一端が明らかにされた。これらの成果に基づいて県内の該期土器の様相をを捉えてみたい。

①中期後半

本遺跡を始めとして甲府市幸町遺跡、勝沼町富町遺跡、甲西町向河原遺跡、大師東丹保遺跡（Ⅰ区）、都留市牛石遺跡などの資料があり、甲府盆地内に集中している。盆地内での資料は中部高地系の栗林式と東部東海（駿河）系の有東式・関東系の宮の台式が存在し、油田遺跡以外は出土量が僅かなため両系統の土器群のあり方は不明である。油田遺跡ではこれまで述べてきたように埋没河道内に中期後半の栗林式と有東式の資料が多量に出土している。栗林式は文様構成から飯山地方の３段階～４段階のものが見られ、後者が主体的となり、有東式も同時期の資料が確認されている。本遺跡は中期後半の両地域間の物流の中継地点となる拠点集落と考えられよう。一方、桂川流域の牛石遺跡は中部高地的手法（横羽状文）もつ個体に結紐文（宮ノ台式）や櫛目鎖状文（相模）が施文され折衷型がみられ、地域性が捉えられる。

②後期前半

中部高地型の櫛描紋系土器群を主体とする地域（Ａ相）と東海系土器群を主体とする地域（Ｂ相）に２分される。Ａ相は甲府盆地北西部を中心に波及し、吉田式段階の甲府市音羽遺跡、敷島町金の尾遺跡Ⅰ期、韮崎市下横屋遺跡、北下条遺跡、八代町下長崎遺跡と箱清水式段階の音羽遺跡、金の尾遺跡Ⅱ期、韮崎市堂の前遺跡、甲西町十五所遺跡、八代町身洗沢遺跡がある。吉田式段階は北信地域と南信地域との関連が考えられる資料がある。前者は甕の胴部中央から下部に櫛描の縦走羽状文、格子目文、斜走文が施文されるものや、壺の肩部文様帯に三角形の鋸歯状沈線区画文を配し、斜行する充填沈線文が施されるものである。後者は甕の胴部上半に櫛描短線文が施文されるものや「く」の字状に屈曲する複合口縁壺の口縁部に櫛描波状文と棒状浮文が付けられるものである。音羽遺跡からは受地台山式も出土している。箱清水式段階は箱清水式の周辺の様相を示す金の尾遺跡や南信地域の中島式が出土した十五所遺跡があり、いずれも東海中部から東部に系譜をもつ土器が混在するようになる。Ａ相の土器様相は中信地域（松本盆地南部、諏訪地方）との共通性が捉えられる。Ｂ相は甲府盆地南部の甲西町住吉遺跡、中道町上の平遺跡、三珠町一条氏館跡遺跡がある。壺や甕は中部東海地方の菊川式土器の新相を示し、高坏には山中式の影響が強く看取されるが、これらの土器群に中部高地型櫛描紋土器は伴出していない。

③後期後半

中部高地系と東部東海系の土器が混在した様相（Ａ相）と西部東海（尾張）系をもつ様相（Ｂ相）が存在する。Ａ相は韮崎市下横屋遺跡、中田小学校遺跡、櫛形町六科丘遺跡、長田口遺跡、増穂町平野遺跡、中道町上の平遺跡、三珠町一城林遺跡、上野遺跡などがあり、甲府盆地北部以北の地域では中部高地系が主体となり、東海系土器が客体的に混在し、盆地内とその周辺地域では東部東海系との強い関連が認められるが、ほとんど中部高地系を伴出しない。中部高地系土器の様相は後期前半のＡ相の延長線上に位置づけられる。Ｂ相は韮崎市坂井南遺跡、後田遺跡、八田村大塚遺跡、櫛形町村前東Ａ遺跡、中道町米倉山Ｂ遺跡などがある。Ｓ字甕Ａ類の出現を最大の特徴とし、これまで中部高地系が主体的であった盆地北部以北の様相も一変し、僅かに残存する程度となる。